

<世界遺産物語>⑩

パレスチナ初の世界遺産「聖誕教会」

今年7月開催のユネスコ世界遺産委員会で、「パレスチナ」国家から初めて聖誕教会が世界遺産に登録された。言わずと知れたイエス・キリストが誕生した「元・馬小屋」である。その半月前に聖誕教会を訪れていた筆者は、このニュースを聞いて狐につままれたような気になった。イスラエルが「首都」(国際法上首都はテルアビブ)と公言するエルサレムは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の3大聖地として、「嘆きの壁」や「岩のドーム」「聖墳墓教会」「ゴルゴダの丘」など数々の著名な宗教関連史跡を有し、世界遺産都市の資格充分と見られている。だが、隣国ヨルダンとの領土問題が微妙にからむ現状は、ヨルダンからの申請を受け、預かり登録という曖昧なものである。筆者の知るイスラエルのガイドさんは、正式な登録ではなくヨルダンが申請することにより(登録の)権利を得たものというふうに理解している。その間隙を縫い、唐突にパレスチナ自治区ベツレヘムにある聖誕教会が、国連未加盟のパレスチナ国家の申請によって世界遺産として認められたのである。

パレスチナはアメリカやイスラエルの反対を押し切り、いま国連に「国家」としての承認を申請中であり、当然イスラエルは政治的意図ありとパレスチナによる聖誕教会の登録には反対していた。

渓谷と坂道の多い丘陵都市エルサレムから、程遠からぬ地にあるパレスチナ自治区への「入国」には、有刺鉄線を張り巡らしたチェックポイントで厳しいボディチェックがある。乗り付けた車も、ドライバーも交代してパレスチナ側の車とドライバーに交代させられる。

入国手続きを済ませて石造りのギリシャ正教風の教会内に入ってみれば、そこには最早国境はない。敬虔なクリスチャンが身を屈めながら歩み、半地下の‘Star of Bethlehem’=「キリスト誕生の地」の前で跪き、お祈りを捧げる。藁の敷かれた木製の厩のイメージはなく、薄暗くはあれどもいまでは大理石に囲まれたペチカ風の、窮屈ながらも聖なる「キリストご誕生の地」であり、細い通路を隔てた向かい側には初めて産湯に浸かった、これも大理石で造られた聖地スポットがある。

2000年も時を経ると厩は伝説となり、かくも「神話」となるものか。外へ出れば、白い雲をちぎったように突き抜ける真っ青な空に、まばゆい太陽が強烈に目に入ってくる。

(近藤節夫)